◎坐禅会資料　　プラトン『饗宴』　　　　　　　　　　　　　　令和４年２月５，６日

**◎『饗宴』（岩波文庫、久保勉訳、1952年）**

（177）「**できるだけ美しくエロス讃美の演説を試みなければならぬ**。」

「**僕だってつねづね、愛に関することのほかは、なんにもわかっていないと主張しているほどだから**、それを拒絶することができない訳だし、またアガトンにしてもパゥサニヤスにしても恐らく同様だろうが、**況（ま）してアリストファネスに至っては、いつもディオニュソスとアフロディテに関する事ばかりを仕事にしている人のことだから、勿論だろう**。」

（178）（ファイドロス）

**美しく生きんと欲するすべての人にとって、その全生涯の指針となるべきもの**、それを**愛（エロス）**ほどあんなに見事にその**魂に植えつける**ことは、血縁にも、栄誉にも、富貴にもその他の何ものにもできないからである。…

したがって私は主張する。恋する男は、**恥ずべき行いをするところとか**、または誰かから侮辱を受けながら、**怯懦（きょうだ）のゆえにこれに反発せぬこととかが暴露したとき**、父親に見られるにしても、友人もしくは他の誰かに見られるにしても、**愛する少年に見られたほどそれほどたまらなくは感じないだろう**、と。またちょうど同じことが愛人においても見受けられる。すなわち**何か恥ずべき事をしているところを見つけれるとき**、**彼が特に甚だしく恥じるのは愛者に対してである**。…

（179）［例えば戦場で］実際愛者なる男にとっては、その持場を離れたり、または武器を投げ出したりするところを愛する少年に見られることは、疑いもなく**他の何人に見られるよりも遥かに耐え難いことであろう**。また彼はそれよりも**むしろ幾度でも死ぬことを願うであろう**。ましてや**愛する少年を見捨てて逃れたり、あるいはその危地に陥るのを見てこれを救いだそうともしなかったりするほど**――**エロス自らの与える霊感によって勇気づけられ（**ἔνθεον**）**、その結果生来の最勇者にも比肩し得るようにならぬほど、**それほどの臆病者は、一人も無いのである**。

それで疑いもなく、ホメロスが、神はある半神（ヘーロース）たちに「**勇気を吹き込んだ**（ἐμπνεῦσαι＜εμπνέομαι）」と語っているところのもの、それこそ**エロスが彼の賜物として愛者達に与えるもの**なのである。

（198）

　こんなわけで僕は、どんなにか立派な演説ができるだろうと大いに自惚れていたものだ――なぜなら僕は、物を讃美する真の方法をよく解していると信じていたから。…　僕達がめいめい**本当にエロスを讃美しようということではなくて、ただ讃美する者のように見せかけようということに**。

（204）

　たほう、無知者もまた智慧を愛求することもなければ、また智者になりたいと願うこともないものです。というのは、**無知がはなはだ厄介なものであるゆえん**はこういう点にあるからです、すなわち**自ら美しくも善くもまた聡明でもないくせに、それで自ら充分だと満足していること**、ちょうどその事に。ですから自ら欠乏を感じていない者は、自らその欠乏を感じていないものを欲求するはずもありません。

（211）　**美そのものを観るに至ってこそ、人生は生甲斐がある**のです、いやしくもどこかで生甲斐があるものならば。一度でもそれを観たならば、貴方はもうそれを黄金や綺羅の類とも、また美しい少年や青年の類とも思いはしないでしょう、――**今の貴方はそういうものを見て夢中になり**、貴方も他の多くの人も、愛人に眺め入って絶えずこれと一緒にいられさえすれば、できることなら、食いもせず飲みもせずに、ただこれを眺め、これと一緒にいたいと願っているのですが。

（212）　**私はそれに説得された。それで私は、今や自ら説得された以上、この宝を得るためには、人性にとってエロス以上の好き助力者を見出すことは容易でないということを他の人々にも納得させるように努めるつもりである**。それだからこそ**私はあえて主張するのである、人は皆エロスを尊重せねばならぬと、そうして私自身も愛の道を尊びかつ何よりも熱心に練習しているし、また他人にもそれを勧告している。で、また私は今もいつまでも、エロスの偉力と勇気とを微力の及ぶかぎり讃美するのである**。

（216）　［ソクラテスの言葉に］僕の心臓は激しく鼓動し、涙が迸り出す。

［雄弁家の演説では］心をかき乱されたことも、**自分が一奴隷の状態にあるように思えて腹を立てた**こともなかった。これに反してここにいるマリュシュアスは、僕の今送っているような生活はもう堪えられないぞとまで思うほどの気持を、幾度となく僕に起させたのである。…

　現に今もやっぱり私は意識している、この人に耳を傾ける気になったが最後、私は抵抗することができず、ただ例の通りの目に逢わされるだけであることを。この人は、**僕が自らまだ欠点の多い身でありながら、アテナイのために奔走して僕自身のことをゆるがせにしているのだと、自白せずにいられなくするのだから**。それで僕は、ちょうどセイレン達から逃げる時のように、強いて耳を蔽うて逃げ去るのだ、老人になるまでもここで彼にくっついていたくはないからねえ。天　ところで僕はただこの人に対してだけ、恐らく誰も僕に期待しないような心持を経験する。それはすなわち人に対する羞恥だ。僕はただこの人の前だけで恥じるのだ。というのは、僕はこの人に向って、「貴方の命ぜられることを為る必要はない」といって反対することができないこと、しかも**この人の許を離れるや否や、多数人の尊敬を得んとする欲望に圧服されてしまうことを、よく自覚してる**からだ。それで僕はこの人の許から走り出し、逃げ去る。がふたたび彼に逢うと、前にした譲歩を顧みて恥入ってしまう。そうしてこの人が人間世界にいなくなったらさぞ嬉しいだろうなどと思うことすらしばしばある。それでもまた、もし万が一そんなことが事実となったら、僕がそれをさらにいっそうひどく悲しむだろうということもたしかである。要するに、この人をどう扱えばいいか、僕にはまったく分らない。

◎『ギリシアの美術』（岩波新書、澤柳大五郎著）

**パルテノンのアフロディテはいかにもゆったりと横たわった状態から軽やかに身を起こす。**…**その身のこなしにはいつでもつと立ち上がれる敏捷さが窺われ、些かの努力も見られない全身**は各部の微妙なバランスを保って居る。（澤柳大五郎）